

発表において、質疑応答等が行われるが、ここにおいても教員たちからは学生の意見を否定するような発言も見られた。

発表後の高森氏へのヒアリングにおいて「壇上の賢人から寄り添う案内人へ」という近年の反転授業のコンセプトが話題に登った。このコンセプトは必ずしも反転授業に限定されるものではなく、学生の能動性を引き出す様々な取り組みにおいて、教員に分かりやすくマインドセットの転換を促すためのコンセプトとしても有効かもしれない。



写真 4-3 発表の様子

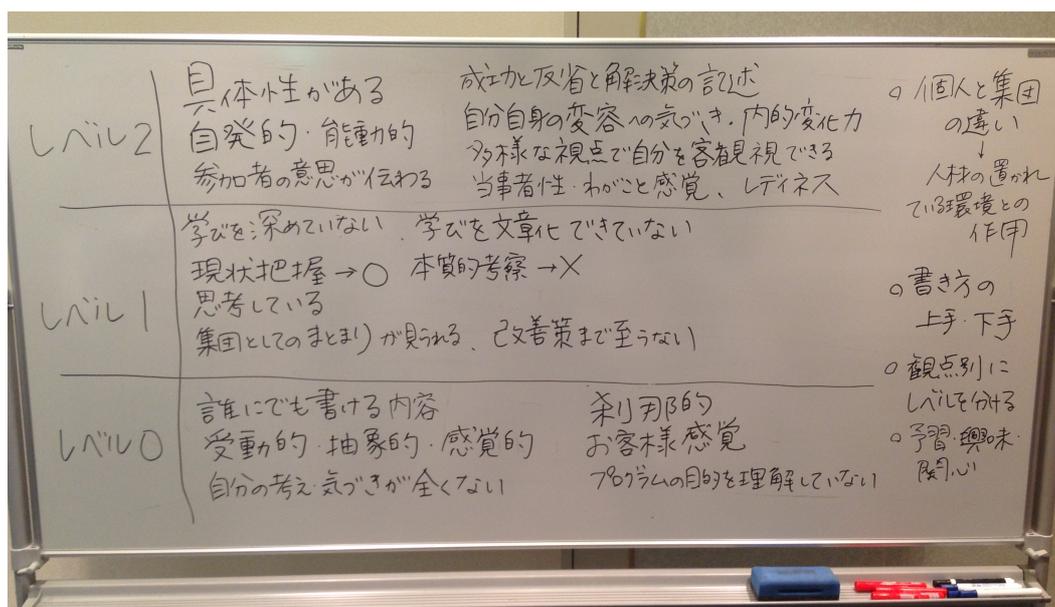


写真 4-4 発表の結果とルーブリック取りまとめの資料

## 6. 合宿型討論会によるルーブリック共同開発の意義と課題

最後に、ここまで見てきた合宿型討論会によるルーブリック共同開発の意義と課題について考察することにした。

まず合宿型討論会の効果が大きく2つ見て取れた。1つ目は参加者の高い満足度である。参加者は、教員の関わり方に是非があるとはいえ、皆一様にグループワークに積極的に参加しており、今後継続して合宿型討論会に参加する旨の発言を繰り返していた。このことから参加者たちが合宿型討論会に満足していることが看取された。

2つ目はジェネリックスキルの涵養である。学生たちはルーブリック共同開発を通して、グループワークのノウハウやチームワーク等について練習する機会を得ていた。合宿には教員や職員も参加しており、学生だけのグループワークとは一味違った経験を積む機会となっただろう。そしてこのことは参加した教員にも当てはまる。教員たちにとっても、学部生たちと比較的フラットな関係で交流する機会は貴重である。この過程で、学生に対する接し方を見直す機会等も得ることができる。

その一方で、ルーブリックへの関係者の見解の反映については、効果は限定的と思われる。確かに参加した教員・学生たちは少なからぬ満足感をもって討論会を終えたようである。しかしその満足は合宿での交流それ自体から生まれた部分が少なくないのではないだろうか。時間等の制約もあって、合宿は、開催期間中にルーブリックを完成させない構成になっている。そのため、参加者は合宿のアウトカムであるルーブリックそのものよりも、合宿のプロセスである教員・職員・学生の相互交流に意識が向いてしまうことになる。最終的に完成したルーブリックに対して、参加者がどの程度納得するのか、また参加しなかった関係者たちにしていどの程度訴求力を持つのかは今後検討する必要があるように思われる。

つまり約言すれば、合宿型討論会の過程そのものが教員・職員・学生間のコミュニケーションの促進や能力開発といった点において効果を持っているが、合宿型討論会のアウトプットについては、別途検証が必要である。この検証は容易ではない。しかし、福島大学のケースについて言えば、今後も継続的に大学メンバーでの対話を繰り返す中で、徐々にしかし着実に納得感の醸成とその検証が進められていくことが予想される。合宿型討論会という実践は、容易に他大学に輸出できるものではないが、少なくとも、福島大学の事例から、ルーブリックづくりにおける構成員間の対話の重要性を教訓として引き出すことは可能である。

### <参考文献>

松下佳代・小野和宏・高橋雄介（2013）「レポート評価におけるルーブリック開発とその信頼性の検討」大学教育学会編『大学教育学会誌』。

Scriven, M. (1980). *The Logic of Evaluation*, Edge Pres.

